

## 『通勤電車シリーズ・人は端っこが好き』

電車に乗る人は、なぜか端っこの席が好きです。始発駅からの空いた電車の場合、まずシートの端から埋まっていきます。空席がまだたくさんあるのに、わざわざ端の席に座るため他の車両へと旅を続ける人もいます。

また、端から二番目にいて、端が空いた場合、余ほどの不精者か、何か確固とした端嫌いの信念をもっている人以外は、素直をに端へ移動します。

何故端がよいのでしょうか。確かに端の席は便利です。車内が混雑してきても、ドアに近いため降車しやすい。“端のそれも降車駅のドアが開く側の端”という席を確保したら、どんなに車内が混雑状態になっても目的の駅に着くギリギリまで座っていることが出来ます。それに雨天の場合、あの忌わしい傘を傍らの手摺りに立掛けることが出来、股ぐらに挟む必要がありません。股ぐら傘ほど人の美意識を傷つけるものではありません。どんなバリッとしたブランドもののスーツでキメていても、あの股ぐらに挟んだ傘一本で艶消しです。それに、ちょっと気を抜くとバタッと前に倒れ、そばにいる女性にキッと睨まれるなど実に厄介です。このように雨天の場合は、『端の席』と『そうでない席』では、かなりの格差があります。しかし、それだけの理由でしょうか。それ以外にも人間は端を好む心理があるように思えます。

例えば何人かのグループで旅行に行き、大部屋で雑魚寝する場合、人気が集中するのは断然壁際の端っこです。最初に布団を敷き就寝態勢に入ろうとする者は、まず100パーセントの割で壁際の端っこをキープしようとします。

いきなり、ドデンと部屋の中央部に陣地を構えるものは滅多にいません。

私は自称『隅に置けない?』ですが、それでも端が好きです。

しかし、『何故っ』って聞かれると全然説明することが出来ず困ってしまいます。

毎日、毎日、鶺鴒の目、鷹の目（うのめ、たかのめ）で端の席を探しています。